

論 文

スポーツコースに所属する高校生の学校・競技生活の現状と課題  
： Jユース選手と他競技選手の比較分析

巽 樹 理 松 井 健

追手門学院大学

追手門学院大学

The present situation and problems of high school students in school and sports settings: A comparative analysis of J-League youth athletes and other sports

Juri TATSUMI

Takeshi MATSUI

Otemon Gakuin University

Otemon Gakuin University

Abstract

The purpose of this study was to investigate how J-league youth athletes perceived their life both in school and sports settings compared with students who are involved in other sports. The data were collected from the students of one private high school and 107 students in total participated in this study. A questionnaire was designed to evaluate, for example, characteristics of the respondents, satisfaction with their life in school and sports settings. As a result, this study demonstrated the distinctive characteristics of the youth athletes. Then, direction for future study was shown.

**Keywords** : J-league youth, high school students, school and sports settings, comparative analysis

---

※巽 樹理 (追手門学院大学基盤教育機構特任助教, スポーツ研究センター)  
松井 健 (追手門学院大学基盤教育機構教授, スポーツ研究センター)

## I. 緒言と目的

近年、Jリーグチームの育成組織であるユースチームの重要性が認められている(注1)。例えば及川(2001)によれば、プロ野球と比較し、クラブチーム(主に所属チームのユース)出身者の割合は15.2%を占め、トップチームへの重要な選手供給源となっていることが指摘されている。さらに、2016年に開催されたリオデジャネイロ五輪出場をかけたアジア最終予選に日本代表(男子)として選出されたメンバーをみると23名中14名がユースチーム出身者であった(サッカーキング・ネクスト,2016.1.13)。Jクラブがユース組織を適切に運営することは今後より一層重要になると思われる。そのため下部組織をより効率的に整備し、競技力向上につながる一貫育成のしくみを作ることが不可欠となる。例えばJユース(高校生年代)については、プロ予備軍としての選手を指定された学校に集結させることが、より一般的な方策となっていくだろう。

これまで、競技を強化するという点ではJユース設立の目的は達成されていると言えよう。しかし、ユースチームを運営していく中で解決されるべき問題が認識されはじめ、中には解決されずに残っているものもある。ユース組織は今やプロ選手になるための登竜門といえる存在であり、ユース選手は将来性を見込まれた有望な人材でもある。

Jユース選手を対象にした先行研究においても、Jユース選手の競技生活と学校生活に着目したものが散見される。立木(2014)は、Jユースクラブ指導者へのインタビュー調査において、指導者が「学校生活への積極的参与」を肯定し、学業を含めた人間教育の重要性を意識している点を明らかにした。また、Jリーグユースチームと高校の提携を結んだ理由について金森(2015)は、サッカーで「体育」を学び、高校で「知育」を学び、両方で「徳育」を育てることの必要性を指摘している。この結果から、教育を強調してきた学校クラブと競技志向を目指してきたJクラブという両者の関係性が変化する可能性があり、学校運動部同様に学業や人間教育といった教育的な部分が意識され始めていることを指摘している。また、Jリーグの事業報告書(2012)においては、育成年代の一貫した指導体制として、子どもたちの人間性や社会性を育む活動を推進することが挙げられている。したがって、一日の大半を過ごす学校生活において、Jユースや運動部がそれぞれの特徴を有した選手

を育成、教育するためには、人的サポートをうまく機能させる必要がある。また、Jクラブとのさらなる連携が求められる中、高校側もユース選手の学校生活と競技生活の両方の現状把握に務めるのが責務であると考えられる。

高校卒業後の進路は、エリート育ちでプロを目指しているユース選手でさえも学年で1~3名ほどしかプロに昇格できないという非常に狭き門である。そのため高校3年間が選手本人にとって、将来を考える貴重な時期になることは間違いない。飯田(2012)はユース選手の進路決定プロセスについて聞き取り調査を行っており、最終的進路決定プロセスにはスタッフ、寮長、寮母さんなどのクラブ関係者たちが関わっていることを明らかにした。一方で山本らは高校一流サッカー選手を対象としたキャリア志向の調査で、サッカーを続けることに不安や悩みを有する者が多く、「サッカー漬け」にしてきたまわりの大人や指導者の責任も指摘している(山本:1999)。Jリーグで活躍するプロサッカー選手のキャリア支援については、公式にサポートをしてくれるJリーグキャリアサポートセンターが存在する一方、Jユース選手のサポート支援に関する体制や情報が少ないという現状もある。こうした背景を踏まえて、選手の多様化する卒業後の進路について、学校としてのサポート体制のあり方を検討する必要がある。特に、Jクラブは、学校運動部とは異なる組織であるため、様々な配慮や連携を伴ったサポート体制が求められる。Jクラブに所属するユース選手全員が通うA高校においても、このようなサポート体制の構築が急務の課題となっている。

そこで、本研究では、Jユース選手の学校・競技生活の実態を他競技選手との比較から明らかにすること、ならびにユース選手育成における今後の方向性を示すことを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象と方法

本研究の対象者は、大阪府内の私立A高校スポーツクラス(1クラス)に所属する1年生から3年生の計107名である。

- Jリーグユース選手(42名)
- 女子サッカー選手(28名)
- 女子ラグビー選手(12名)
- アメリカンフットボール選手(25名)

特徴として、本研究で対象としたJユース選手におい

ては、ユース入りが確定したと同時に指定されたA高校の入学が義務付けられている。また、その他の競技、女子サッカー、女子ラグビー、アメリカンフットボール競技のスポーツ推薦入学者とともに1学年1クラスのスポーツコース生として所属している。

調査方法としては、通常授業内の総合学習の時間帯に、筆者が調査の趣旨説明を行い、同意を得てから調査を開始した。約30分で全員の記入が終了し、全数調査であった為、回収率は100%であった。

## 2. 調査実施日・場所・実施方法

調査日：2015年9月5日午前

調査場所：A高校視聴覚室

実施方法：留置法による質問紙調査

(107部の回収、有効回答数107部)

## 3. 調査項目

### 1) 基本的属性

年齢、学年、出身地、代表選手の経験

### 2) 競技としてのキャリア形成に関わる要因

競技をはじめた時期、きっかけ、など

### 3) 自身の身体能力について

### 4) 現在の(学校・競技)環境要因

競技環境の満足度、競技成績の満足度、現在の学習状況(学力・勉強量)、学習と競技の比重(小・中・高)など

### 5) 進路決定プロセス

卒業後の進路、将来を考えるきっかけ、決定における重要な他者の存在、引退後など

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 基本的属性

表1は、年齢、学年、出身地を示したものである。調査対象者は全てスポーツ推薦者であり、出身では大阪府が63.0%と最も多く、次いで兵庫県9.3%、京都府8.4%である。Jユース選手に関しては、出身が大阪府であっても学校から15分以内にある指定された寮に入ることが求められている。

表1. 調査対象者の基本的属性

年齢	N (%)	出身地	N (%)
15歳	18(16.8)	大阪府	67(63.0)
16歳	34(31.8)	兵庫県	10(9.3)
17歳	35(32.7)	京都府	9(8.4)
18歳	20(18.7)	奈良県	6(5.6)
		滋賀県	4(3.7)
学年	N (%)	三重県	3(2.8)
1年	38(35.5)	栃木県	1(0.9)
2年	37(34.6)	東京都	1(0.9)
3年	32(29.9)	岐阜県	1(0.9)
		愛知県	1(0.9)
		和歌山県	1(0.9)
		島根県	1(0.9)
		徳島県	1(0.9)
		沖縄県	1(0.9)

本研究の対象となった選手の最も高い競技歴(表2)と各競技選手とのクロス集計を示した(表3)。全選手107名うち93名(86.9%)が何らかの代表を経験しており、全体的に高い競技レベルといえよう。競技別では、Jリーグユース選手が各年代のナショナルチームである日本代表ユースに4名(9.5%)、ジュニアユースに5名(11.9%)選出されている。上向ら(2007)が報告しているように、近年ではJリーグの下部組織に所属する選手が増え、目ざましい活躍をしていることが、この結果からもうかがえる。また、女子ラグビー、女子サッカー、アメリカンフットボールに関しては学校内のクラブ活動ではあるが、女子ラグビー選手12名のうち7名(58.3%)が高校選抜に選出されており、7人制女子ラグビーとしてはレベルの高い安定したチームが結成されている。

表2. 調査対象者の競技成績

	N (%)
日本ユース代表	4(3.7)
ジュニアユース代表	6(5.6)
ジュニア代表	2(1.9)
高校選抜	7(6.5)
ブロック代表	17(15.9)
都道府県代表	31(29.0)
市代表	26(24.0)
その他	14(13.1)

表3. 各競技と競技成績のクロス集計

	日本代表 ユース	ジュニア ユース代表	ジュニア代表	高校選抜	ブロック代表	府・県代表	市代表	その他	N (%)
Jユース	4(9.5)	5(11.9)	0(0.0)	0(0.0)	9(21.4)	18(42.9)	5(11.9)	1(2.4)	
女子サッカー	0(0.0)	1(3.6)	0(0.0)	0(0.0)	2(7.1)	13(46.4)	2(7.1)	10(35.7)	
女子ラグビー	0(0.0)	0(0.0)	1(8.3)	7(58.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(16.7)	2(16.7)	
アメリカンフットボール	0(0.0)	0(0.0)	1(4.0)	0(0.0)	6(24.0)	0(0.0)	17(68.0)	1(4.0)	

## 2. 競技としてのキャリア形成にかかわる要因

選手が競技を始めた時期やきっかけなど、スポーツへの社会化を促進する要因について、各競技の特性を検討する。競技別でみると(表4)、Jユース選手は小学校以前に始めた者が20名(47.6%)、小学校低学年で始めた者は19名(45.2%)であり、両者合わせて全体の92.8%を占めた。上向ら(2007)がJリーグユース選手を対象に行った調査によれば、小学校以前に競技を始めたものは33.7%であり、小学校低学年で始めたものは57.5%であった。上向ら(2007)の結果と比較してみると、本研究の対象の方が小学校以前に競技を始めた者がやや高い割合ではあるが、90%以上が小学校低学年までに競技を始める点に関しては同様の結果がみとめられたと考える。アメリカンフットボールに関しては、競技

を始めた時期が高校生(40.0%)と他の3競技に比べて遅く、高校生の時期に他競技から転身した者が多いことがうかがえる。

競技を始めたきっかけについては、表5に示した。8つの要因の中で最も当てはまるものを1つ選択してもらった。その結果、Jユース選手においては、「兄弟の勧め(影響)」(40.5%)と回答した者が最も多く、次いで「自分自身の判断で」「友人のすすめ」共に(19.0%)であった。またJユース選手と同様に「兄弟(姉妹)の勧め(影響)」という身近な人的要因で開始したと回答した者が最も多い女子サッカー選手(46.4%)、女子ラグビー選手(33.3%)に対して、アメリカンフットボール選手は、「自分自身の判断で」(36.0%)と回答した者が最も多い。これは競技開始時期が遅いことが影響していると考えられる。

表4. 競技を始めた時期

	小学校以前	小学校低学年	小学校高学年	中学生	高校生	N (%)
Jユース	20(47.6)	19(45.2)	1(2.4)	2(4.8)	0(0.0)	
女子サッカー	5(17.9)	14(50.0)	6(21.4)	3(10.7)	0(0.0)	
女子ラグビー	2(16.7)	0(0.0)	1(8.3)	7(58.3)	2(16.7)	
アメリカンフットボール	1(4.0)	4(16.0)	4(16.0)	6(24.0)	10(40.0)	

$\chi^2 = 73.259^{***}$

$***p < .001$

表5. 競技を始めたきっかけ

	両親のすすめ	自分自身の判断で	兄弟のすすめ	友人のすすめ	学校・監督のすすめ	憧れの選手	観戦して	その他	N (%)
Jユース	6(14.3)	8(19.0)	17(40.5)	8(19.0)	0(0.0)	2(4.8)	0(0.0)	1(2.4)	
女子サッカー	3(10.7)	6(21.4)	13(46.4)	5(17.9)	1(3.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
女子ラグビー	2(16.7)	2(16.7)	4(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(16.7)	0(0.0)	
アメリカンフットボール	4(16.0)	9(36.0)	6(24.0)	1(4.0)	3(12.0)	2(1.9)	4(3.7)	1(0.9)	

$\chi^2 = 30.256 (n.s.)$

表6に、過去に競技を辞めたいと思ったことの有無についての回答結果を示す。Jユース選手は「非常にそうだ」5名(11.9%)、「ややそうだ」14名(33.3%)と両者合わせて45.2%であり、「そうではない」と答えた者が23名(54.8%)と最も多かった。一方で、女子サッカー選手は「非常にそうだ」3名(10.7%)と「ややそうだ」18名(64.3%)を合わせると7.0%、7割以上の選手が競技を辞めたいと思った過去があることが

明らかになった。さらに女子ラグビー選手に至っては「非常にそうだ」2名(16.7%)と「ややそうだ」10名(83.3%)を合わせて100%、12名全員が辞めたいと思ったことがあることが分かった。アメリカンフットボール選手は非常にそうだ4名(16.0%)と「ややそうだ」12名(48.0%)を合わせて64.0%であった。これらの結果から、Jユース選手は他の競技と比較すると、競技継続意欲が高い傾向であることが明らかとなった。

これは、先行研究である上向ら（2007）が、全Jユース選手を対象にした調査において確認した「競技を辞めたいと思ったことの有無」の結果と同様の傾向であった為、全Jユース選手は他の競技者に比べ、競技継続意識が高いといえよう。

表6. 過去に競技を辞めたいと思ったことはあるか N (%)

	非常にそうだ	ややそうだ	そうではない
Jユース	5(11.9)	14(33.3)	23(54.8)
女子サッカー	3(10.7)	18(64.3)	7(25.0)
女子ラグビー	2(16.7)	10(83.3)	0(0.0)
アメリカンフットボール	4(16.0)	12(48.0)	9(36.0)

$\chi^2 = 15.793^*$

\* $p < .05$

### 3. 自身の身体能力について

表7は、自身の身体能力について示した。Jユース選手は「あまり恵まれていない」(28.6%)と回答した者が最も多く、「恵まれていない」(14.3%)を合わせると42.9%のJユース選手が自身の身体能力について否定的に受容している。これは、統計的な違いは認められなかったものの、他の競技と比較して、本研究対象の中では一番優れた実績をもつJユース選手の多くが、自身の身体能力を否定的に受容していることは予想外の結果であった。このことには、Jユース選手という、全国から選抜された非常に競技力の高い選手が集結した中で、互いに自分の能力を比較している状況、つまりユース選手間での競争が日常化している環境的背景が関連していると思われる。

表7. 自身の身体能力について

	非常に恵まれている	やや恵まれている	どちらともいえない	あまり恵まれていない	恵まれていない
Jユース	3(7.1)	10(23.8)	11(26.2)	12(28.6)	6(14.3)
女子サッカー	0(0.0)	13(46.4)	9(32.1)	4(14.3)	2(7.1)
女子ラグビー	1(8.3)	1(8.3)	8(66.7)	1(8.3)	1(8.3)
アメリカンフットボール	2(8.0)	7(28.0)	11(44.0)	1(4.0)	4(16.0)

$\chi^2 = 19.712$  (n.s.)

### 4. 現在の(学校・競技)環境について

表8は、現在の学校環境の満足度を示したものである。学校生活では1学年7クラスであり、うち1クラスが本研究の対象者であるスポーツコース生である。学校生活の全体的な満足度では「非常に満足」(13.1%)と「ほぼ満足」(49.5%)の両者で62.6%であった。

一方、表9に示すように競技環境の満足度は「非常に満足」(63.6%)と「ほぼ満足」(29.0%)の両者で92.6%を占め、学校生活全体よりも高い値であった。全体的に競技を行う上での環境面に恵まれ、充実した競技生活を送ることができていることが、これらの結果からうかがえる。さらに競技別での満足度をみると、Jリーグユース選手においては、「非常に満足」(83.3%)と「ほぼ満足」(14.3%)の両者を合わせて97.6%の選手が、競技における環境面で非常に高い満足度を示した。これは、先行研究である上向ら（2007）のJリーグユース全選手を対象とした調査報告データ（注1）と比較しても高い満足度である。

したがって、本研究の対象者であるA高校に通うJリーグユース選手は、他のユース選手と比較してより良いサッカー環境で活動していると考えられる。具体的に、

Jリーグユース選手におけるサッカー環境の満足度の理由を自由記述で回答してもらったところ、以下の点が挙げられた。

- 人工芝、トレーニングルームが完備されている
- 支給品含め、用具が完備されている
- トレーニングの開始時間が早く、食事や睡眠が満足にとれ、規則正しい生活が送れている
- コーチやトレーナーなどのスタッフが充実している
- サッカーに集中できる生活を送れている

特徴としてはJユース選手が1校（A高校）に集中し、寮生活・学校生活・トレーニングが一貫した環境で行われるため、効率良く移動ができ、またサッカーに打ち込める施設環境が十分に完備されていると感じている選手が多い。また女子サッカー選手、女子ラグビー選手においても「非常に満足」が最も多く、「ほぼ満足」を合わせると女子サッカー選手は89.2%、女子ラグビー選手は100%と競技環境に対して高い満足度を示した。アメリカンフットボールに関しては、「ほぼ満足」(48.0%)が最も多かったが、「非常に満足」(36.0%)を合わせると84.0%であった。

表8. 学校生活の満足度

	N (%)				
	非常に満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満	非常に不満
Jユース	4(9.5)	19(45.2)	15(35.7)	2(4.8)	2(4.8)
女子サッカー	3(10.7)	15(53.6)	8(28.6)	2(7.1)	0(0.0)
女子ラグビー	0(0.0)	7(58.3)	4(33.3)	1(8.3)	0(0.0)
アメリカンフットボール	7(28.0)	12(48.0)	5(20.0)	0(0.0)	1(4.0)

$\chi^2 = 11.856$  (n.s.)

表9. 競技環境の満足度

	N (%)				
	非常に満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満	非常に不満
Jユース	35(83.3)	6(14.3)	1(2.4)	0(0.0)	0(0.0)
女子サッカー	16(57.1)	9(32.1)	2(7.1)	1(3.6)	0(0.0)
女子ラグビー	8(66.7)	4(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
アメリカンフットボール	9(36.0)	12(48.0)	4(16.0)	0(0.0)	0(0.0)

$\chi^2 = 20.350^*$

\* $p < .05$

表10では、小学生から高校生（現在）までの競技と勉強への没頭度を示した。「競技中心」と「勉強中心」を両端する5段階の基準で選んでもらった結果、全体的に競技選手別の傾向がみられた。小学生時に「競技中心」を選択した者はJユース選手が最も多く59.5%であった。次いで女子サッカー25.0%、アメフト12.0%、女子ラグビーは0%という結果であった。前述したように、女子ラグビー、アメリカンフットボール選手に関しては、中学生以降に競技を開始する者が多い。そのため今回の小学生時の回答に対して「競技中心」を選択していないのは妥当な結果であるといえる。

次に、中学生時の没頭度では、「競技中心」を選択したJユース選手64.3%、女子サッカー28.6%、女子ラグビー8.3%、アメリカンフットボール32.0%と4競技とも小学生時に比べて競技志向者がわずかながら増えている。女子2競技に至っては、「両立」と答えた者が最も多く、女子サッカー28.6%、女子ラグビー33.3%と、競

技と勉強を「両立」していた様子が伺える。

最後に現在で（高校時）では、「競技中心」を選択したJユース71.4%、女子サッカー50.0%、女子ラグビー50.0%、アメリカンフットボール60.0%と全ての競技において5段階評価の中で最も競技志向の高い「競技中心」を選択した割合が多く、「勉強中心」と返答している者は一人もいなかった。

小学生から時系列で結果を追っていくと、Jユース選手は他の競技選手と比べて早期段階で勉強よりサッカー中心の生活を送っている。中学校時代では「やや勉強重視」「勉強重視」を合わせて1人（2.4%）のみであった。山本ら（1999）が調査した高校一流サッカー選手のサッカーへの没頭度が「やや勉強重視」「勉強重視」の両者を合わせて8.2%であったことと比べると2.4%はより低値であるが、傾向としては同様であった。さらに今回は、Jユース選手だけではなく、他の競技者との比較ができたことも有意義であった。

表10. 勉強の没頭度

	N (%)						
	競技中心	やや競技中心	両方	やや勉強重視	勉強中心	無回答	
小学生							
Jユース	25(59.5)	6(14.3)	8(19.0)	1(2.4)	2(4.8)	0(0.0)	
女子サッカー	7(25.0)	8(28.6)	7(25.0)	3(10.7)	1(3.6)	2(7.1)	
女子ラグビー	0(0.0)	0(0.0)	4(33.3)	2(16.7)	0(0.0)	6(50.0)	
アメリカンフットボール	3(12.0)	3(12.0)	2(8.0)	2(8.0)	5(20.0)	10(40.0)	
$\chi^2 = 60.084^{***}$ *** $p < .001$							
中学生							
Jユース	27(64.3)	11(26.2)	3(7.1)	1(2.4)	0(0.0)	0(0.0)	
女子サッカー	8(28.6)	7(25.0)	8(28.6)	4(14.3)	0(0.0)	1(3.6)	
女子ラグビー	1(8.3)	1(8.3)	4(33.3)	1(8.3)	1(8.3)	4(33.3)	
アメリカンフットボール	8(32.0)	3(12.0)	1(4.0)	2(8.0)	3(12.0)	8(32.0)	
$\chi^2 = 53.193^{***}$ *** $p < .001$							
現在							
Jユース	30(71.4)	8(19.0)	4(9.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
女子サッカー	14(50.0)	9(32.1)	5(17.9)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
女子ラグビー	6(50.0)	5(41.7)	0(0.0)	1(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	
アメリカンフットボール	15(60.0)	8(32.0)	2(8.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	

$\chi^2 = 14.724$  (n.s.)

表11は、競技の悩みの相談相手について競技別に比較したものである。競技の悩みの相談相手について比較分析 ( $\chi^2$ 検定) を行った結果、6項目中2項目に違いが認められた。相談相手として「監督やコーチ」を選択した者はJユース選手47.6%、女子サッカー17.9%、女子ラグビー16.7%、アメリカンフットボール24.0%となり、Jユース選手の半数近くはJリーグ所属の監督やコーチに競技の悩み相談を持ち掛けていることがわかった。また4競技を通して高い値を示したのが、「同競技の選手」であった。その中でも女子サッカー選手は82.1%で

あり、他の相談相手と比較しても非常に高い値を示した。

一方、表12に示した競技以外での悩みについて、競技別では統計的な違いは認められなかったものの、「親」「同競技選手」では、どの競技も比較的高い値を示している。これらの結果から、全体的に「親」と「同競技選手」を主な相談相手として選択しているが、Jユース選手においてはJリーグ所属の監督やコーチ(14.3%)ともコミュニケーションをとり、技術面だけではなく幅広く相談ができる環境が整っているのではないかと考えられる。

表11. (競技以外の悩み) 相談相手について

	Jユース (n=42)	女子サッカー (n=28)	女子ラグビー (n=12)	アメフト (n=25)	d.f	$\chi^2$
親	50.0	50.0	41.7	32.0	2	2.47
監督やコーチ	14.3	3.6	0.0	4.0	2	4.84
同競技選手	50.0	50.0	50.0	24.0	2	5.26
他競技のクラスメイト	9.5	3.6	16.7	12.0	2	2.07
学校の先生	2.4	0.0	8.3	12.0	2	5.24
その他	11.9	32.1	33.3	12.0	2	6.72

※複数回答

表12. (競技の悩み) 相談相手について

	Jユース (n=42)	女子サッカー (n=28)	女子ラグビー (n=12)	アメフト (n=25)	d.f	$\chi^2$
親	52.4	35.7	50.0	36.0	2	2.80
監督やコーチ	47.6	17.9	16.7	24.0	2	9.44 *
同競技選手	59.5	82.1	50.0	40.0	2	10.37 *
他競技のクラスメイト	7.1	3.6	16.7	12.0	2	2.42
学校の先生	0.0	0.0	0.0	4.0	2	3.31
その他	14.3	17.9	41.7	24.0	2	4.59

\* $p < .05$

※複数回答

次に「現在の勉強量」について他の一般生徒と同量が確保できているかどうかを質問した結果を表13に、また「今後の勉強量の確保」を表14に示した。現況について、勉強量の確保が「できていない」と回答した者は、Jユース83.3%、女子サッカー100%、女子ラグビー83.3%、アメリカンフットボール80.0%となり、どの競技も非常に高い値を示し、勉強量の不足を自覚していることが明らかになった。それを踏まえ、今後の勉強量についても回答してもらった結果、「もっと確保したい」に高い値を示したのが女子サッカーで75.0%、続いて女子ラグビーが66.7%であり、女子の両競技が意欲的であることがわかった。男子では、アメリカンフットボールが48.0%で、約半数が勉強量の確保を望んでいることが明らかになった。一方、Jユースに関しては、勉強量が十分に確保できていないことを自覚していながら、

「もっと確保したい」(28.6%)と答えた者は3割に満たず、「現況で良い」が52.4%と半数以上であった。今後の勉強量については、競技別に統計的な違いが認められた。したがって、本研究の対象者であるスポーツコースに所属している高校生の今後の勉強量・時間・授業内容といった環境的要因については、競技別の学習意欲の特徴も踏まえて、学校側と再検討し整えていく必要性が明らかになった。

表13. 現在の勉強量の確保

	N (%)	
	できている	できていない
Jユース	4( 9.5)	35( 83.3)
女子サッカー	0( 0.0)	28(100.0)
女子ラグビー	1( 8.3)	10( 83.3)
アメリカンフットボール	3( 12.0)	20( 80.0)

$\chi^2 = 5.955$  (n.s.)

※無回答者が多いため母数が異なる

表14. 今後の勉強量の確保

	N (%)	
	もっと確保したい	現況で良い
Jユース	12(28.6)	22(52.4)
女子サッカー	21(75.0)	5(17.9)
女子ラグビー	8(66.7)	2(16.7)
アメリカンフットボール	12(48.0)	6(24.0)

$\chi^2 = 18.285^*$

\* $p < .05$

※無回答者が多いため母数が異なる

続いて、学校の強化クラブに所属する生徒と学外のクラブチーム（Jクラブ所属ユース）に所属する生徒が共存する、全国でも極めて珍しいクラスについて、各選手はどう感じているのであろうか。Jユース選手に「学校も寮もクラブチームも24時間同じユース仲間との共存について、どのように感じていますか」という質問（自由記述）を行った結果、例として以下のような意見が見られた。

- ◆ずっと一緒にいることで絆が深まっていっていると思うし、楽しく過ごせている
- ◆みんなと常に一緒にいるのでコミュニケーションがしっかりとれているし、もし困った事があってもすぐに話せるので良いと思う。
- ◆先輩と話す機会が増えて先輩が思っていることとか自分が思っていることとか話せてお互いのことが知れて良いと思う

これらの自由記述の回答をまとめる方法として、著者が回答の中から重要だと思われる語句を抽出し、カテゴリー別に分類した。

< Jユース選手の回答における語句の集約 >

- 楽しい (11件)
- コミュニケーション (10件)
- 絆 (8件)
- チームワーク、チーム力、団結力 (5件)
- 良い環境 (5件)
- 人間関係 (先輩含) (2件)
- その他 (肯定) (6件)
- その他 (否定) (4件)
- どちらでもない (2件)

集約された回答を見ても分かるようにJユース選手は、選手同士の共同生活を、非常に肯定的に捉えている。特にサッカーに関係するような意見が多く、ただ「楽しい」というだけでは理解することができない「絆」や「チーム力」、「一体感」を同じクラスで過ごす上で構築できていることを認識している。一方で、学年で1～2

名ではあるが、「世界が狭くなるので学校は違うほうが良かった」「楽しいが、たまにしんどい」「たまには一人の時間がほしい」「学校は一緒でもクラスは別でもよかった」との否定的な意見も認められた。

次に、女子サッカー、女子ラグビー、アメリカンフットボール選手には「Jユース選手（学外クラブ）との共存（同じクラス）についてどのように感じていますか」との質問（自由記述）を行った結果、例として以下のような意見がみられた。

- ◆クラスの雰囲気が明るくなり、たまにボールをさわっているところを見れるので、レベルの高いプレーを見れて自分の刺激にもなっている（女子サッカー）
- ◆ガンバユースだけど、普通に喋れて楽しい（女子ラグビー）
- ◆スポーツに関しての意識の高さに驚いていて、すごく刺激になる（アメリカンフットボール）

これらの自由記述の回答を各カテゴリーに分類した結果、以下のようにまとめられた。

< 女子サッカー、女子ラグビー、アメリカンフットボール選手の回答における語句の集約 >

- 明るい、楽しい、元気 (30件)
- 刺激 (20件)
- 尊敬 (8件)
- 競技意識が高い (5件)
- 嬉しい (5件)
- 切り替え (サッカーと私生活の違い) (4件)
- 応援したい (4件)
- その他 (肯定) (5件)
- その他 (否定) (3件)

Jユース選手と同じクラスメイトということに対して、「楽しい」「刺激になる」など、他競技の選手は、クラスメイトであるJユース選手に対して好意的な意見を持っていることがうかがえる。一方で、否定的な意見としては「授業中の言動」が挙げられており、肯定的な意見として見られた授業中の「盛り上げ」や「明るくて賑やか」が、ごく少数の者には困惑する原因となっていることも明らかになった。この自由記述による質問紙に関して（調査対象校である）A高校の教員は当初、否定的な意見が多くあがるのではないかと懸念していた。しかし、今回の結果ではクラスメイト同士、互いに心理的に良い刺激を与えられている生徒が多くいることが分かり、良

い意味で予想が外れる結果となった。

### 5. 進路決定プロセス

ここでは将来の志向性について、現時点での卒業後の進路希望を競技別(表15)とJユースの学年別(表16)でみていくことにする。その結果、表15に示したように、競技別でみた卒業後の進路では、Jユースとそれ以外の競技で、統計的な違いがみられた。Jユース選手は「プロ」を目指す3つの項目(「プロしか考えていない」9.5%「プロを目指しているが厳しければ大学進学」57.1%「大学卒業後にプロ」11.9%)を合わせると78.5%とプロ志向が非常に高いことがわかる。

一方で「大学でのプレー」を求める2項目(「大学の強豪校でプレー」「大学で楽しくプレー」)においては、合わせると女子サッカー64.3%、女子ラグビー4.6%、アメリカンフットボール64.0%とJユースを除く他の競技選手で大学志向が目立った。また、表16で示したJユース選手の学年別志向性でも違いがみられた。具体的には、1年のユース選手は1名(高校卒業後に引退)を除く全ての選手(93.3%)がプロ志向(「プロしか考えていない」6.7%「プロを目指しているが厳しければ大学進学」86.7%)であり、入学時からプロへの夢と希望を抱いてトレーニングに励んでいる様子がわかる。しかし学年が上がると同時に上記のプロ志向の値が下がり2年ユース選手では76.9%、3年ユースに至っては28.5%となっている。プロへの狭き門を目の当たりにしているのか、それに比例し、「大学の強豪校でプレー」1年ユース0.0%、2年ユース7.7%、3年ユース21.4%と上昇し、同じく「大学卒業後にプロ」1年ユース0.0%、2年ユース15.4%、3年ユース21.4%とプロから大学志

向に移行している様子もうかがえる。

ここではJユース選手を対象におこなった飯田(2012)の研究を参考に、Jユース選手における進路決定プロセスを考察する。Jユース選手は1・2年時にいかに多くトップチーム(サテライト)の合宿や練習に参加できたかが重要であり、この実績がプロに昇格可能かどうかの判断材料となっている。つまり、Jユース選手は学年が上がるにつれて、ふるいにかけて、プロ以外の選択肢を考えざるを得ないようになる。プロになるための厳しい現実を直視しながら将来の進路を決定しているといえよう。一方で、上向ら(2007)は「各育成年代の選抜歴が高い選手ほど、職業像をプロ選手として明確に志向している」ことを指摘している。これに関しては、本研究においても同様の結果が得られた。一方、上向らの研究では、「学年があがるほど強く上を目指す傾向がある」のに対して本研究は、逆の結果であった。その理由として、上向ら(2007)の調査では、対象となった3年生ユース選手の母数が1・2年生と比較して少ないことがあげられる。Jユース選手の中には、競技を続けていく途中でプロへの道が難しいと判断され、ユースクラブを辞める者もいる。したがって3年生まで続ける選手は、トップを目指すに資する能力があると評価され、実際にプロを目指して取り組んでいる者である(上向ほか2007)。しかし、本研究対象者の3年生の何人かは、プロ選手と自分の力量の差を痛感し、不安を抱きながらもユース選手として活動に励んでいる。その中で、次の活躍の場を大学に求め、プロへのチャンスを完全には諦めていない者が多いことが明らかとなった。先行研究では報告されていないJユース選手の異なった部分が見えたのではないかと考えられる。

表15. 高校卒業後の進路について

	プロしか考えていない	プロを目指しているが厳しければ大学進学	大学の強豪校でプレー	大学で楽しくプレー	留 学	大学卒業後にプロ	高校卒業後に競技引退	就職し、楽しくプレー	その 他
Jユース	4( 9.5)	24(57.1)	4( 9.5)	0( 0.0)	1( 2.4)	5(11.9)	1( 2.4)	0( 0.0)	1( 2.4)
女子サッカー	1( 3.6)	1( 3.6)	8(28.6)	10(35.7)	0( 0.0)	2( 7.1)	0( 0.0)	1( 3.6)	5(17.9)
女子ラグビー	0( 0.0)	0( 0.0)	4(33.3)	1( 8.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	3(25.0)	0( 0.0)	4(33.3)
アメリカンフットボール	0( 0.0)	0( 0.0)	12(48.0)	4(16.0)	1( 4.0)	0( 0.0)	5(20.0)	1( 4.0)	2( 8.0)
$\chi^2 = 95.120^{***}$									$^{***}p < .001$

表16. Jユース選手(学年別)高校卒業後の進路について

	プロしか考えていない	プロを目指しているが厳しければ大学進学	大学の強豪校でサッカー	大学で楽しくプレー	留 学	大学卒業後にプロ	高校卒業後に競技引退	就職し、楽しくプレー	その 他
1年	1( 6.7)	13(86.7)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 6.7)	0( 0.0)	0( 0.0)
2年	2(15.4)	8(61.5)	1( 7.7)	0( 0.0)	0( 0.0)	2(15.4)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)
3年	1( 7.1)	3(21.4)	3(21.4)	0( 0.0)	1( 7.1)	3(21.4)	0( 0.0)	0( 0.0)	3(21.4)
$\chi^2 = 22.480^*$									$^*p < .05$

次にキャリアプロセスについて、重要な他者の存在(表17)、将来を考えるきっかけ(表18)、決断の時期(表19)の3つの視点から述べる。まず、「重要な他者の存在」を質問したところ、Jユースで最も多かったのが「親」(52.4%)であり、半数以上を占めている。続いて「監督・コーチ」(31.0%)であり、「学校の先生」に関しては0.0%であった。また、Jユースと同様に重要な

存在に「親」を選択した女子サッカー(75.0%)は7割以上であり、女子ラグビーは「親」(33.3%)と「学校の先生」(25.0%)に分散していた。一方、アメリカンフットボールは「監督・コーチ」(36.0%)が最も多く、次いで親(24.0%)という結果であった。共通しているのは、どの競技でも「親」の存在を重要視していることが分かった。

表17. 進路における重要な他者の存在

	N (%)				
	監督・コーチ	学校の先生	親	友人(同競技)	友人(同競技以外)
Jユース	13(31.0)	0(0.0)	22(52.4)	3(7.1)	0(0.0)
女子サッカー	2(7.1)	1(3.6)	21(75.0)	3(10.7)	0(0.0)
女子ラグビー	2(16.7)	3(25.0)	4(33.3)	1(8.3)	0(0.0)
アメリカンフットボール	9(36.0)	2(8.0)	6(24.0)	3(12.0)	1(4.0)

$\chi^2=32.773^*$

\* $p<.05$

次に将来を考える「きっかけ」になった時期についてみてみると(表18)、Jユース選手の54.8%が「中学生」が将来を真剣に考えるきっかけの時期であったと回答した。同様に女子サッカー(28.6%)と女子ラグビー(50.0%)も全ての項目の中では「中学生」が最も多くなったのに対して、アメリカンフットボールは「高校1年」(28.0%)が最も高い値となった。また、現時点で「まだ考えていない」と回答したのがJユース4.8%に対し、女子サッカー17.9%、女子ラグビー25.0%、アメリカンフットボール36.0%となり、Jユース選手の進路を考えるきっかけが他の選手に比べて早期であること、現時点での進路のイメージを持っている者が多いことが分かる。次に、将来を「決断」した時期をみてみると(表19)、「中学生」と回答した者はJユースが最も多く57.1%であった。6割近い選手が自らの将来を中学生時に決断しており、女子サッカー10.7%、女子ラグビー33.3%、アメリカンフットボール28.0%と比較して、早

期に将来を決断していることが分かる。その理由としてJユース選手の「きっかけ」「決断」の自由記述に多かった、「Jユース選手への昇格」もしくは「入団が決まったこと」があげられる。中学生の終わりにJユースに選抜されたことが将来の決断に重要な影響を及ぼしていることが明らかとなった。これは高橋・重野(2010)が指摘するキャリアトランジション理論でいう「イベント」(何らかの出来事)から起こる転機であると考えられる。今回の対象者はすべて選抜されたユース選手であり、今後もサッカーエリートとして歩いていく可能性がある。一方で、エリートのキャリアを歩んできた選手や全てを犠牲にしてきた選手は、「ノンイベント」(引退や戦力外通知、監督から使われない等)によって大きなストレスを受けるとの指摘もあり、今回の調査のようなかたちで現状を定期的に把握することは、今後の選手サポートを検討するうえで、非常に重要であると考えられる。

表18. 将来を考えるきっかけになった時期

	N (%)				
	中学生	高校1年生	高校2年生	高校3年生	まだ考えていない
Jユース	23(54.8)	6(14.3)	7(16.7)	4(9.5)	2(4.8)
女子サッカー	8(28.6)	4(14.3)	5(17.9)	6(21.4)	5(17.9)
女子ラグビー	6(50.0)	1(8.3)	2(16.7)	0(0.0)	3(25.0)
アメリカンフットボール	6(24.0)	7(28.0)	3(12.0)	0(0.0)	9(36.0)

$\chi^2=24.911^*$

\* $p<.05$

表19. 将来を決断した時期

	N (%)				
	中学生	高校1年生	高校2年生	高校3年生	まだ考えていない
Jユース	24(57.1)	3(7.1)	2(4.8)	2(4.8)	11(26.2)
女子サッカー	3(10.7)	0(0.0)	2(7.1)	5(17.9)	17(60.7)
女子ラグビー	4(33.3)	1(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	7(58.3)
アメリカンフットボール	7(28.0)	3(12.0)	3(12.0)	0(0.0)	12(48.0)

$\chi^2=32.380^*$

\* $p<.05$

最後の設問では3つの視点から「将来」について尋ねた。1番目に「人生に対してのビジョンを具体的に描いているかどうか」(表20)を質問したところ、Jユース選手では「非常にそうだ」(26.2%)「ややそうだ」(64.3%)の両者を合わせると90.5%と非常に高い数値であり、「そうではない」は、9.5%であった。女子サッカー選手では「非常にそうだ」が3.6%、「ややそうだ」が60.7%、「そうではない」が35.7%であった。Jユースに比べて具体的なビジョンを描いていない選手が多かった。女子ラグビー選手、アメリカンフットボール選手、これらの2競技においては70%以上の選手が将来のビジョンを意識していることが分かった。Jユース選手は、他競技の選手と比べ、ユースに昇格するなどの人生の転機を早くに迎えやすいために、将来を考える、または決断する時期も早くなる(高橋・重野,2010)。このことは、今回調査したJユース選手にもあてはまり、他競技の選手より人生に対してのビジョンを早期に具体的に描いていることが明らかとなった。

次に「将来に対して(引退後)不安であるか」を質問した(表21)。Jユース選手は「非常にそうだ」(33.3%)、「ややそうだ」(52.4%)、「そうではない」(14.3%)と回答しており、将来に対して不安と感じている選手が「非常にそうだ」と「ややそうだ」を合わせると85.7%であった。1999年にJリーグ選手協会により行われた選手への意識調査の中では「引退後の生活に不安を抱く」と回答したJリーグ選手が9割であり、本研究が対象にしたチームのユース選手に関してもほぼ同様の結果であった。ユースからプロ引退まで、各段階でのプレッシャーが大きいことがうかがえる。競技人口が多く、ライバルが多いことが背景にあると考えられる。

3番目の「将来(引退後)に備えて(現時点で)準備はしているか」という質問に対して(表22)、Jユース選手は「非常にそうだ」(2.4%)、「ややそうだ」(26.2%)、「そうではない」(71.4%)と答えており、準備をしている者が少ない。一方、女子サッカー選手は、Jユース選手に比べると「ややそうだ」の人の割合が高いが、この質問項目では競技種目間での統計的有意差はみられなかった。

今回の調査で、引退後や将来の不安は多くの者が抱いているが、現時点では、競技種目にかかわらず将来に対しての準備は不足していることが明らかになった。高校生の選手からすれば引退が遠い先のように思えるのは不

思議ではない。しかし、引退後に直面する問題として、選手という役割を失うことが自分自身のアイデンティティを失うように感じられる心理的問題と、引退後のビジョン、そして技術的な準備不足が常に起こり得ると高橋・重野(2010)は指摘する。高校生を含む現役のスポーツ選手が引退後をどのように考えるかということは非常に重要な点である。しかし、それらの問題について深く述べることは本稿の目的からずれてしまうため、ここでは控えることにしたい。

表20. 人生に対するビジョンを具体的に描いている

	非常にそうだ	ややそうだ	そうではない
Jユース	11(26.2)	27(64.3)	4(9.5)
女子サッカー	1(3.6)	17(60.7)	10(35.7)
女子ラグビー	0(0.0)	9(75.0)	3(25.0)
アメリカンフットボール	4(16.0)	14(56.0)	7(28.0)
$\chi^2=13.992^*$		* $p<.05$	

表21. 将来に対して(引退後)不安がある

	非常にそうだ	ややそうだ	そうではない
Jユース	14(33.3)	22(52.4)	6(14.3)
女子サッカー	9(32.1)	16(57.1)	3(10.7)
女子ラグビー	3(25.0)	8(66.7)	1(8.3)
アメリカンフットボール	9(36.0)	8(32.0)	8(32.0)
$\chi^2=7.619$ (n.s.)			

表22. 将来(引退後)に備えて(現時点で)準備をしている

	非常にそうだ	ややそうだ	そうではない
Jユース	1(2.4)	11(26.2)	30(71.4)
女子サッカー	0(0.0)	11(39.3)	17(60.7)
女子ラグビー	0(0.0)	3(25.0)	9(75.0)
アメリカンフットボール	1(4.0)	6(24.0)	18(72.0)
$\chi^2=3.241$ (n.s.)			

#### IV. まとめ

本研究の目的は、高校生スポーツ選手を対象とした育成段階における今後の支援の方向性を示す為に、Jリーグ所属チームの下部組織と提携を結んでいるA高校スポーツコースに所属するJユース選手と、他競技選手における学校・競技生活の実態を明らかにすることであった。ここでは2つのポイントに焦点をあててまとめを行いたい。

本研究は、Jユース選手の学校・競技生活の実態を他競技選手との比較から明らかにすること、ならびにユース選手育成における今後の支援の方向性を示すことを目的として行った。ここでは、1)他競技との比較によって明らかにされたJユース選手の特徴、ならびに2)今後の研究の方向性に焦点をあててまとめを行いたい。

## 1. 他競技との比較によって明らかにされたJユース選手の特徴

- 自身の身体能力について、他競技と比較しても高成績を収めている選手が多いにも関わらず、自身の身体能力を否定的に受容している。
- Jユース選手は、勉強量が足りていないことを認識しながら現状維持を望んでいることが、他競技選手と大きく異なる。
- ユース選手同士の共存（同クラス）について、「楽しい」以外に「絆が深まる」「コミュニケーションがとれる」「団結力や一体感が強まる」といったサッカーに繋がる肯定的な意見が多い。
- Jユース選手の存在が、他競技者に良い刺激（心理的な向上）を与えていることが明らかになった。一方で、授業中の言動に対して、否定的な意見も少数ではあるが見受けられた。
- Jユース選手は他競技の選手より、人生に対するビジョンを早期に具体的に描けている。

## 2. 今後の研究の方向性

- 1) Jリーグ選手が引退後の進路を考える際に、問題を抱えやすいことが報告されている（高橋・重野,2010）。問題解決には、高校での学習が重要な役割を果たすが、本研究ではJユース選手の学習に取り組む姿勢が消極的であることが明らかになった。そのため、今後は、Jユース選手の学習を促す動機づけの強化についても研究を行いたい。
- 2) 本研究は、引退後のビジョンが具体的に描けているか、いつか引退するという将来への不安の有無を調べた結果、Jユース選手は他の選手に比べてビジョンが具体的に描けていることが明らかになった。一方で、将来に対して（引退後）の不安は、どの競技も共通して多くの選手が不安を抱えていることも明らかになった。今後は、ユース選手が描いているビジョンの具体性や引退への不安などを質的に明らかにする研究を行う必要があるであろう。
- 3) Jユース選手と一緒に学校生活を送ることに對して、クラスメイトの多くの者が肯定的に捉えていることが示唆された。今後、Jユース選手を高校で受け入れることが、他の生徒の学校生活にどのような影響を与えるのかを定量的に検討することも視野に入れたい。
- 4) チームが提携先の1校に限定して就学することのメ

リットとして、Jユース選手同士の絆、団結力、コミュニケーション力などの強化・向上が示唆された。今後の具体的な検討として、複数の高校と提携しているJユースチームとの比較を行いたい。

(注1) Jリーグユースとは、1993年、Jリーグが開幕した後、各プロクラブは育成組織の運営が義務づけられ、各々のチームはトップチームの他にユースチーム（18歳以下）、ジュニアユースチーム（15歳以下）の保有がその加盟規定として定められている（上向ら2009）

(注2) 上向ら（2007）が行ったJリーグユース全選手を対象とした調査報告データでは、「サッカー環境の満足度」において「非常に満足」（53.3%）「ほぼ満足」（30.7%）の両者を合わせると84.0%であった。

## 参考文献

- 金森喜久男（2015）スポーツ事業マネジメントの基礎知識. 東邦出版.
- 環境政策ゼミナール（2011）大学とJリーグクラブとの連携協定に関する調査. 経済論集, 14: 95-102.
- 飯田義明（2012）Jクラブに所属するユース選手における進路決定プロセスに関する一考察. 専修大学体育研究紀要, 36: 17-28.
- 上向貫志・飯田義明・玉井朗・東海林毅（2007）Jリーグユース選手におけるキャリア形成過程とプロ志向に関する研究. 武蔵大学人文学会雑誌, 39(2): 101-115.
- 上向貫志・飯田義明（2009）Jリーグユース選手におけるキャリア志向性に関する研究. 武蔵大学人文学会雑誌, 40(3): 83-92.
- 及川愛（2001）サッカーのプロ選手を目指す高校生の学校生活と進路選択. 人間研究, 37: 61-67.
- 立木宏樹（2014）少年期スポーツにおけるクラブと学校運動部の関係性に関する社会学的研究－Jユースクラブと高校サッカー部の意識形成の比較より－. 九州保健福祉大学研究紀要, 15: 13-22.
- 高橋潔・重野弘三郎（2010）Jリーグキャリアの転機－キャリアサポートの理論と実際－. 日本労働研究雑誌, 52(10): 16-26.
- 山本教人・多々納秀雄・吉田毅・三本松正敏・松尾哲矢（1999）高校一流サッカー選手のキャリア形成過程

とキャリア志向. 健康科学, 21:29-39.

吉田毅 (2013) 競技者のキャリア形成史に関する社会学的研究. 道和書院.

サッカーキング・ネクスト (2016.1.13) リオ五輪アジア最終予選に臨むU-23日本代表、メンバー23名中14名がユース出身. <http://www.sknext.jp/national/news/22067>, (参照日2016年2月2日).